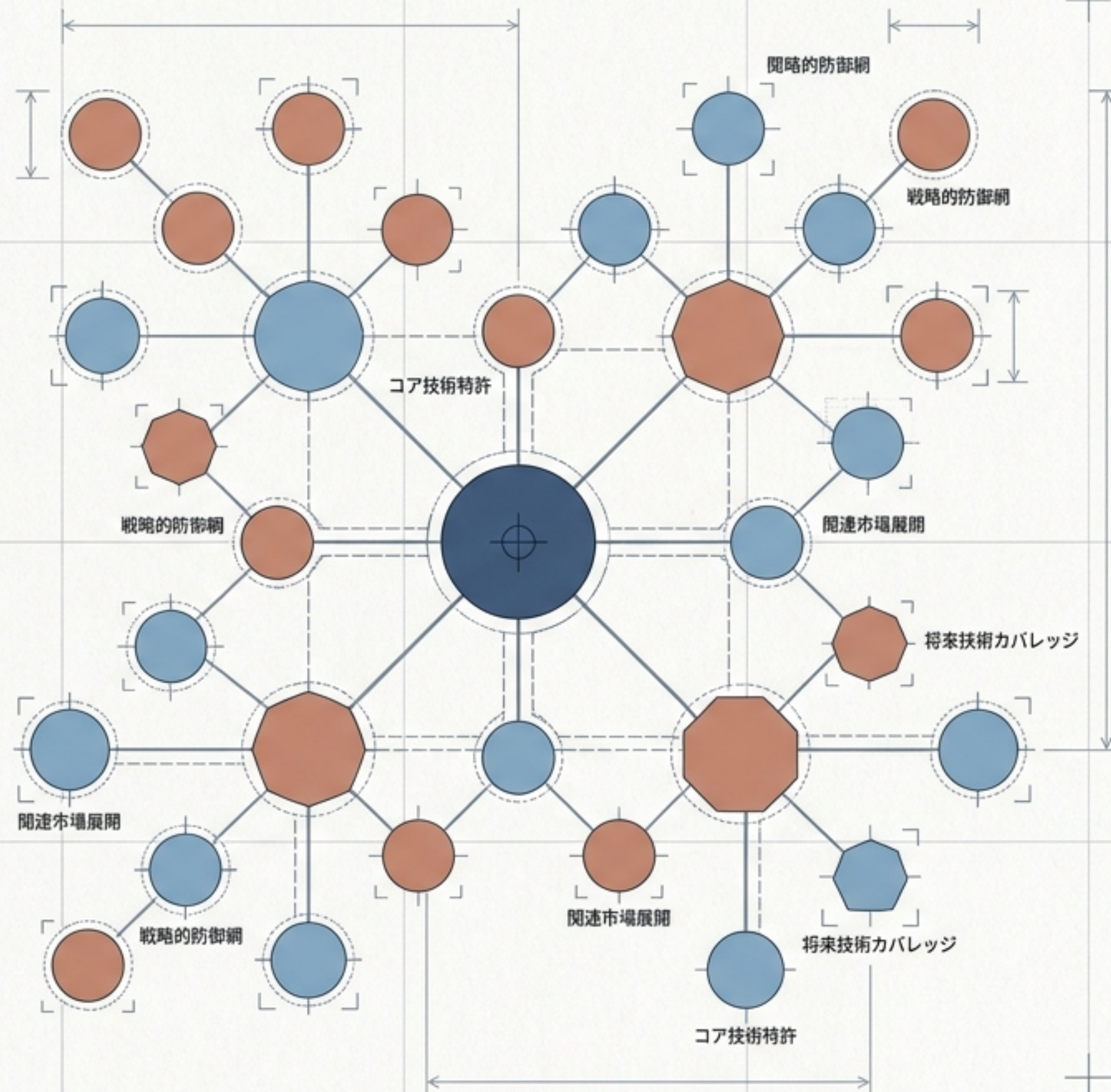


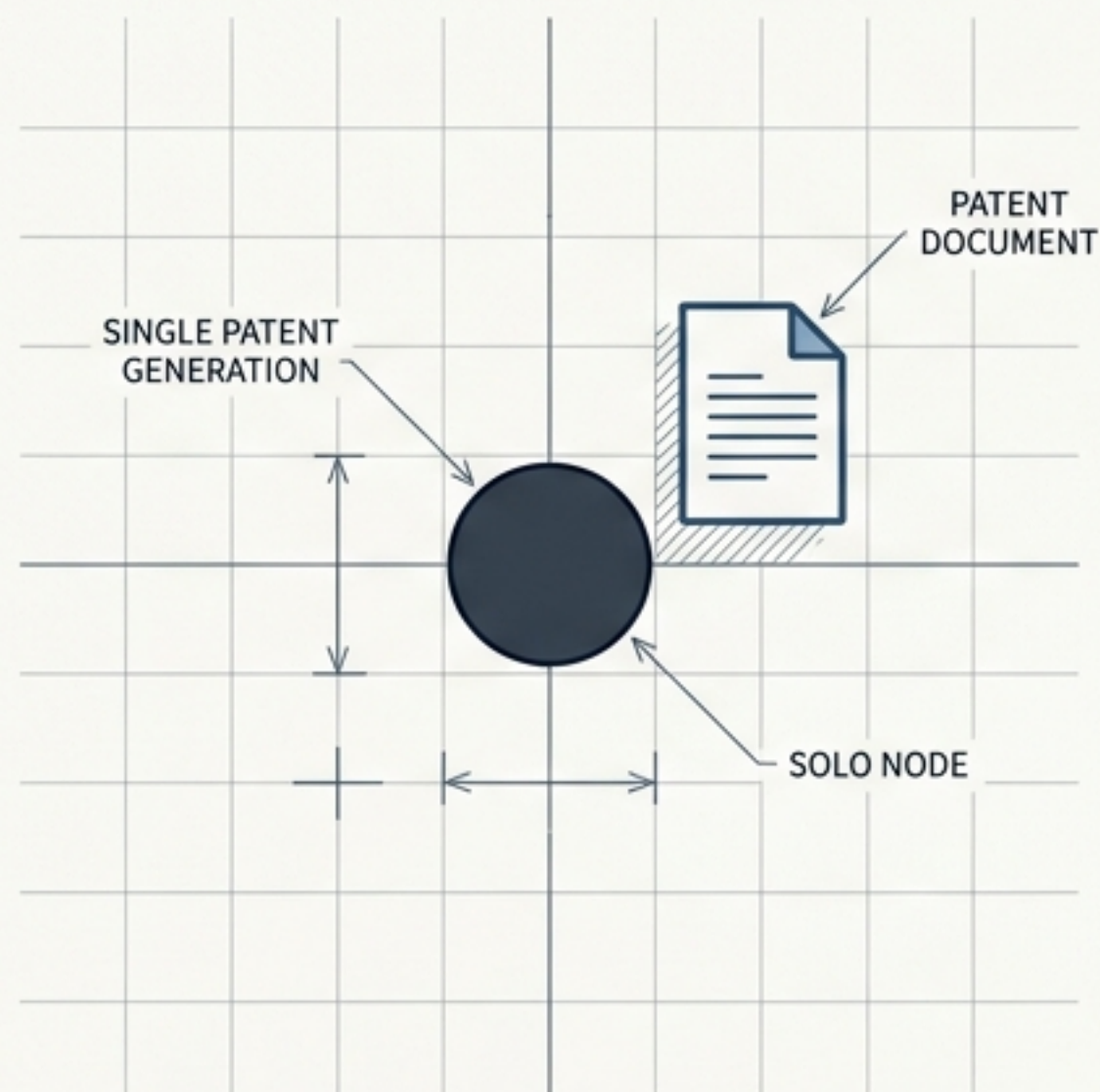
AIによる特許網構築の パラダイムシフト

2025-2026年 知財・情報フェア比較調査
から読み解く戦略的設計の最前線

調査・編集：知財戦略インサイト調査部
発行：2026年10月

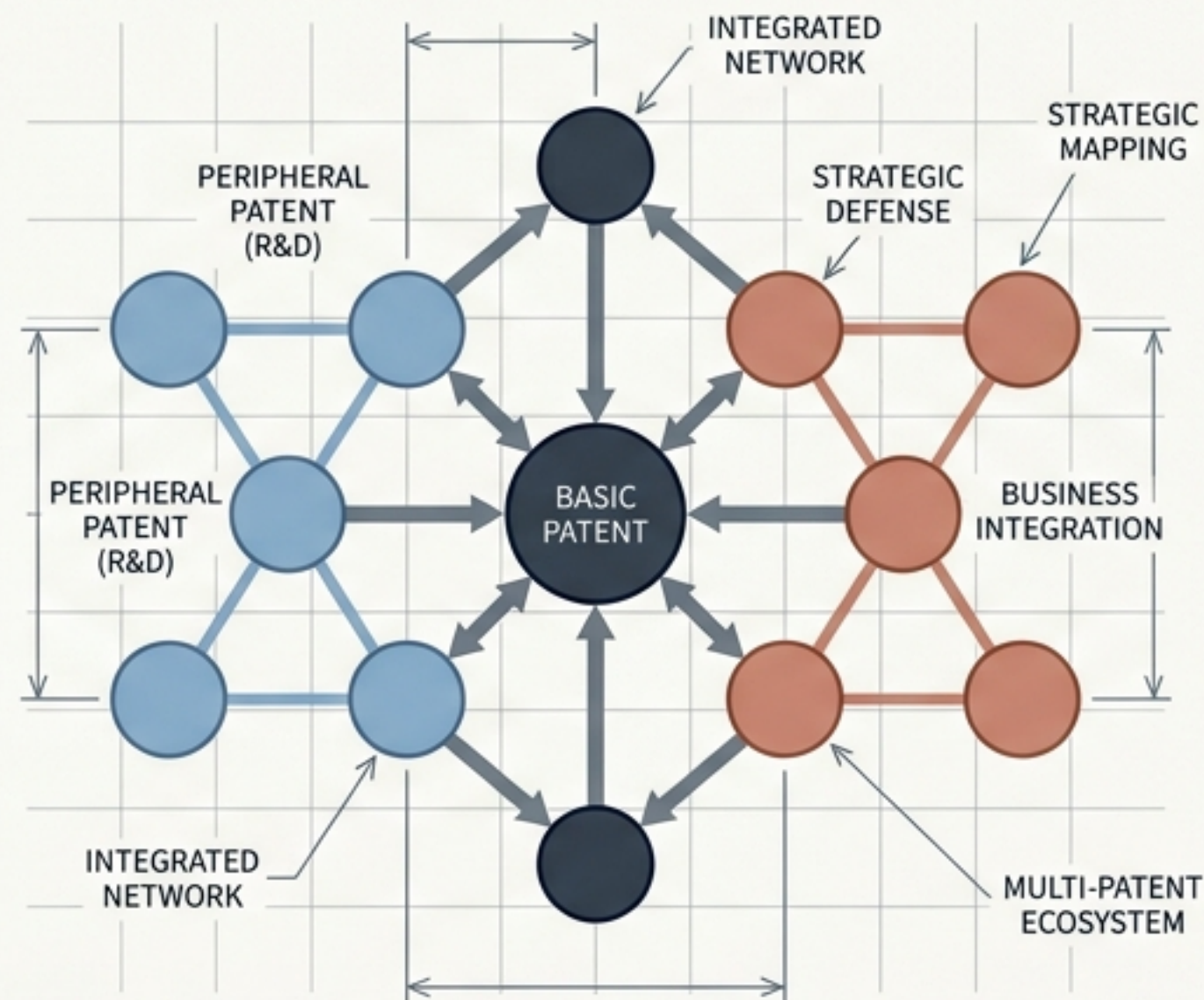


2025年：基盤の確立（孤立した点）



発明創出、ポートフォリオ分析、AIエージェントによるアイデア整理と単一特許の明細書生成が主流。「点」としての機能強化。

2026年：戦略的設計（網としての結びつき）



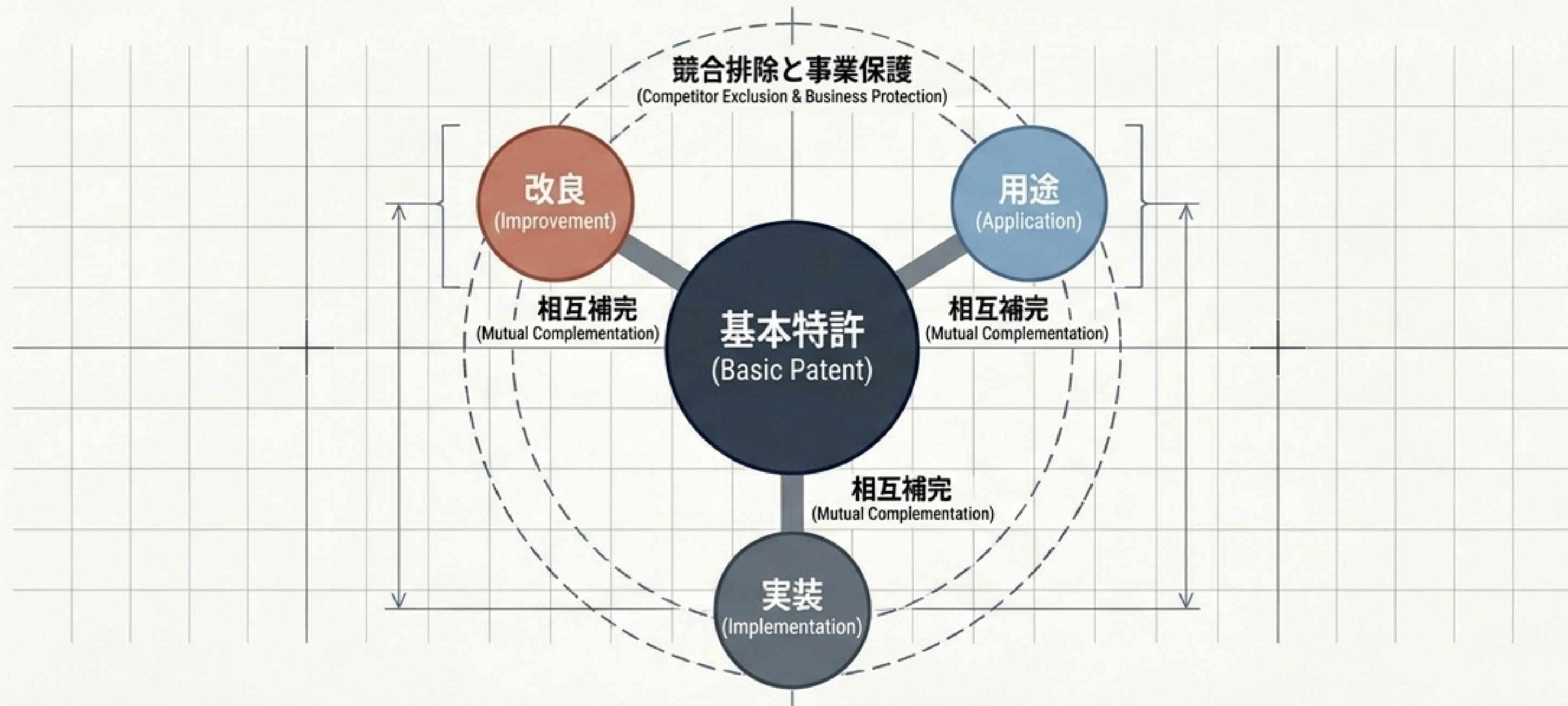
基本特許を中心とした「周辺特許群」の直接生成。事業戦略・研究開発・出願判断を統合し、特許間の「関係性」を設計するフェーズへ。

パラダイムシフト・マトリクス：単一処理から統合システムへ

	2025	2026
焦点 (Focus)	単一の特許・発明	特許群の関係性（網の設計）
入力 (Input)	アイデア・プロンプト	基本特許・社内事業データ
出力 (Output)	明細書・抽出テキスト	戦略的な周辺出願の候補群
人間の役割 (Human Role)	テキストの編集者・校正者	戦略的選択者・法的妥当性の検証者

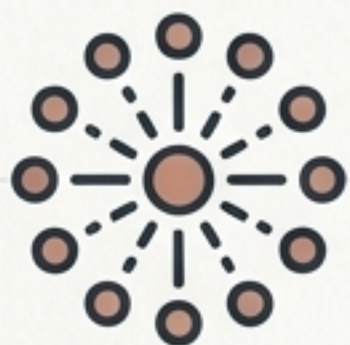
変化の本質は、個々の機能の登場ではなく、それらを「事業戦略」と「出願判断」に直接つなぐ手法が確立された点にある。

特許網の解剖図：事業を保護する相互補完アーキテクチャ



特許網構築とは、単なる件数の増加ではない。「事業を保護するため、基本・改良・用途・実装などの発明を相互補完する権利群として設計すること」である。

2026年 統合ワークフロー・エコシステム



Step 1: 候補生成 (Candidate Generation)

- AI Samurai (発明ホコタテ)
- 発明御三家



Step 2: 拡張・選別 (Expansion & Selection)

- NGB (CPC分析)
- LexisNexis (Protégé)
- AIBS



Step 3: データ統合 (Data Integration)

- Amplified (MCP)
- HackCamp (GraphRAG)
- NTT Data

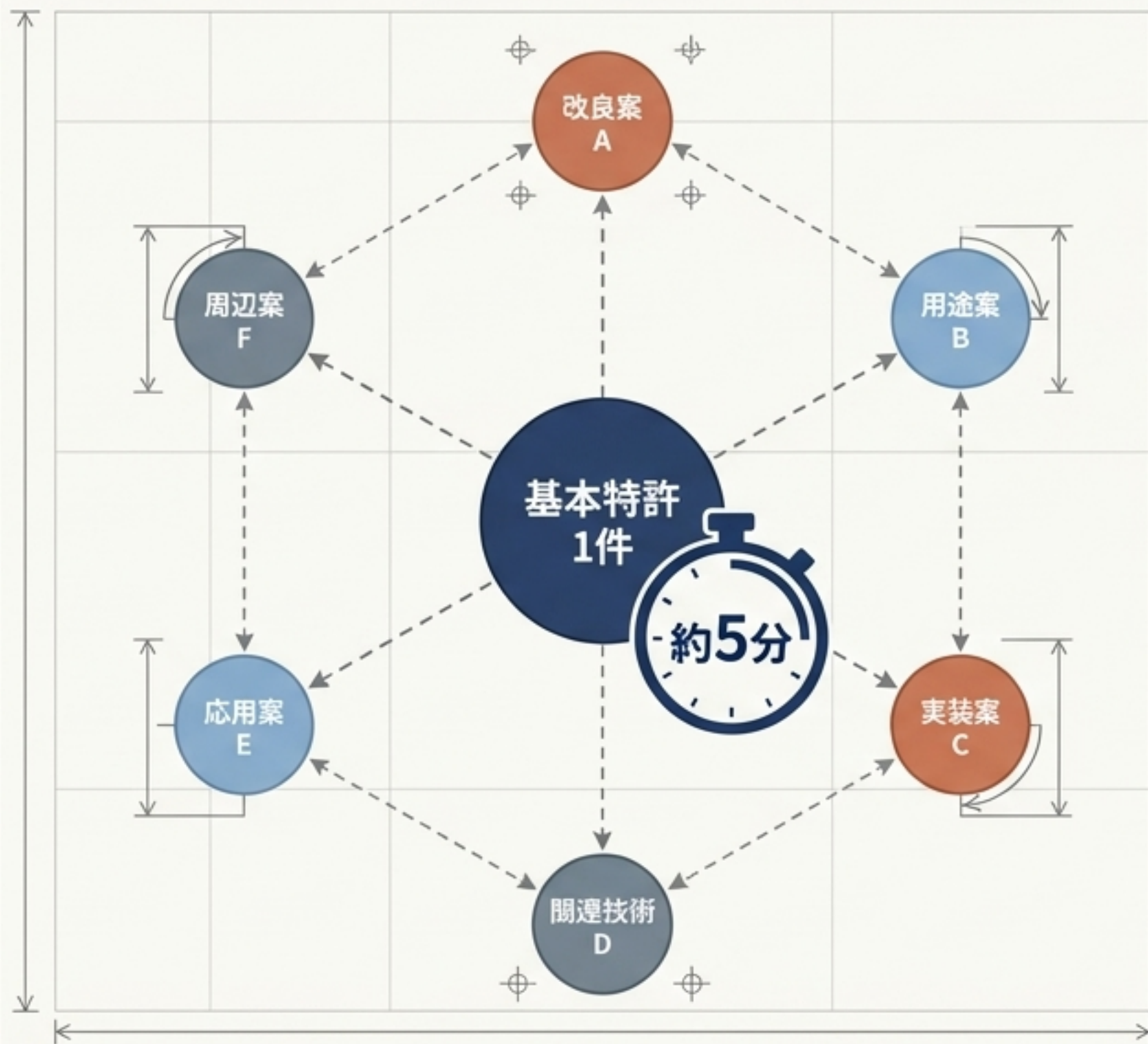


Step 4: 専門家実行 (Expert Execution)

- aiip & スズエ国際特許事務所
- パソナ

これらの専門特化型AIが連動し、単一の「特許自動化」から
「知財スタック」へと進化している。

第1の柱：特許網の直接生成（「ホコタテ」拡張モデル）



Concept

散在するアイデアの整理から、基本特許を起点とした「役割の異なる周辺特許群」の直接生成への進化。

Data Point

AI Samuraiの「発明ホコタテ」は、基本特許1件から、役割の異なる周辺特許群の案を5～6件、約5分で生成。

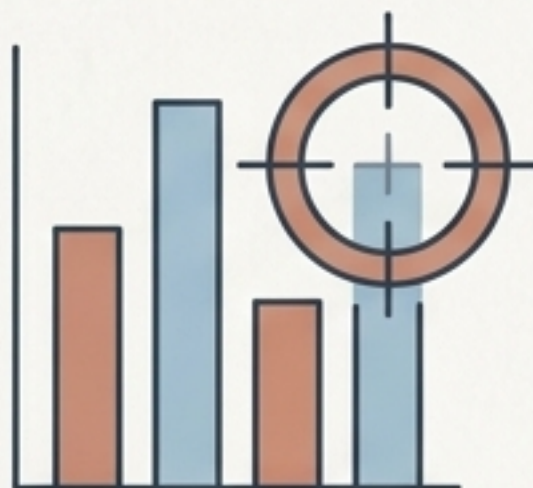
Strategic Implication

検討単位が「個々の発明」から「複数の発明の関係（ネットワーク）」へと劇的に拡大。
「革新度」の設定により展開範囲の調整が可能に。

第2の柱：戦略的フィルタリングと資源の集中

候補生成が容易になるほど、「何を囲い、どこに出願資源を集中するか」という選別工程が権利群の質を左右する。

NGB



米国・ドイツのCPC別出願動向・放棄率を分析。生成AIで市場・技術情報と結び付け、権利を加・維持する領域を仮説検証。

AIBS / ビジネスランドスケープ



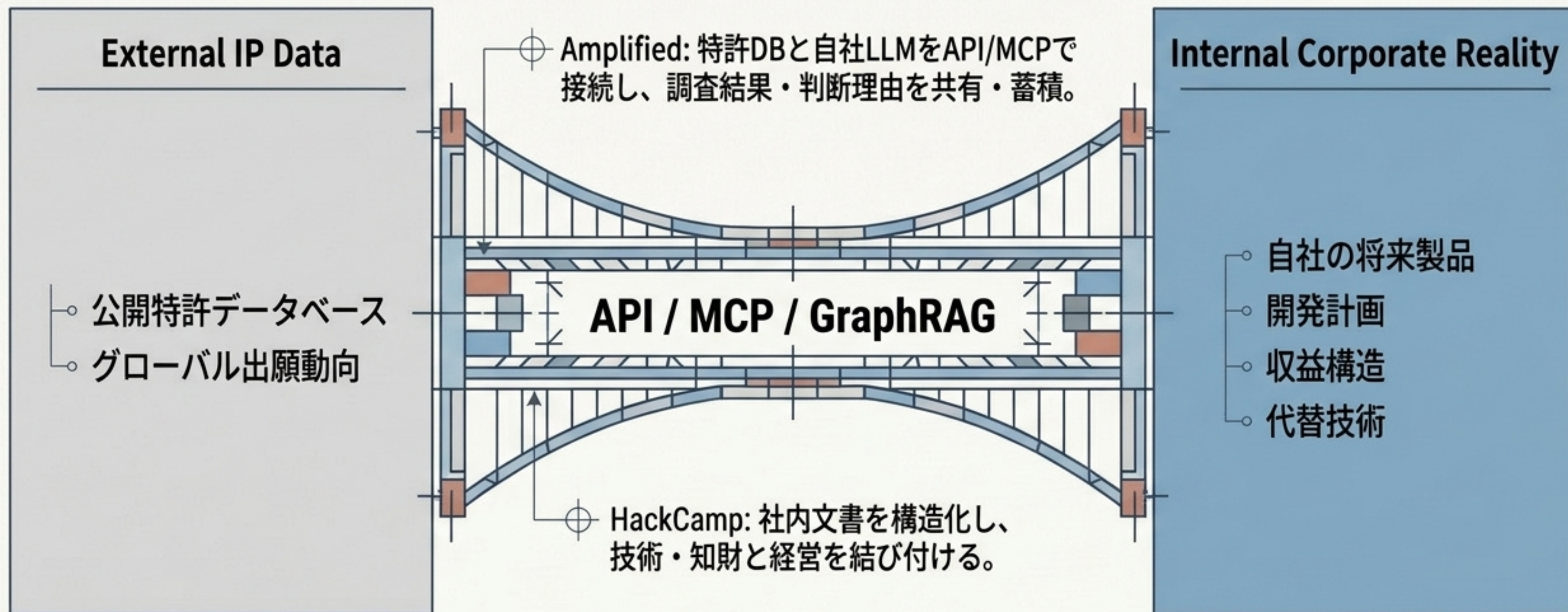
構造戦略論・特許ポートフォリオ理論を生成AIで可視化。事業上の重要部分を見極め、権利を集中させる設計思想。

LexisNexis / Protégé



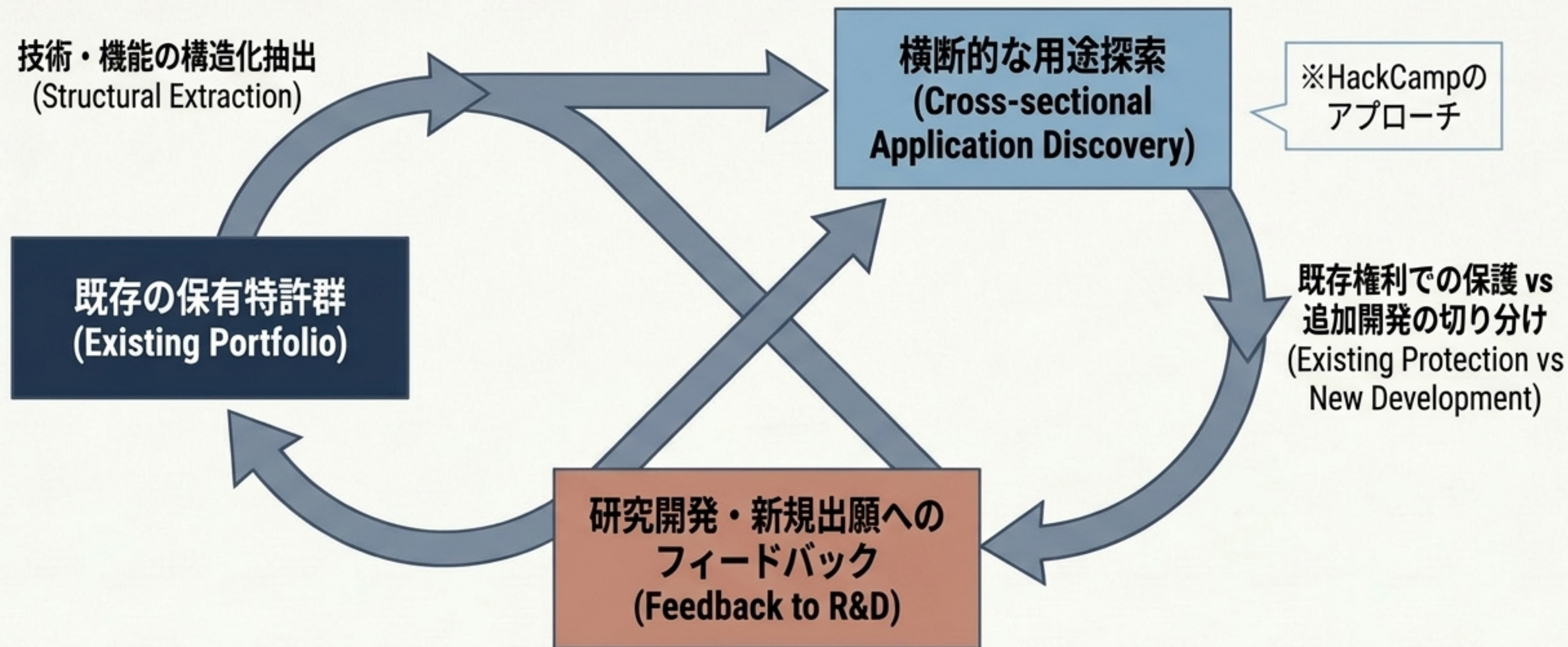
PatentSight+に対し自然言語で問いかけ、競争環境、成長技術、ポートフォリオの強み・課題を分析し補強対象を選定。

第3の柱：データ接続ブリッジ（API / MCP / RAG）



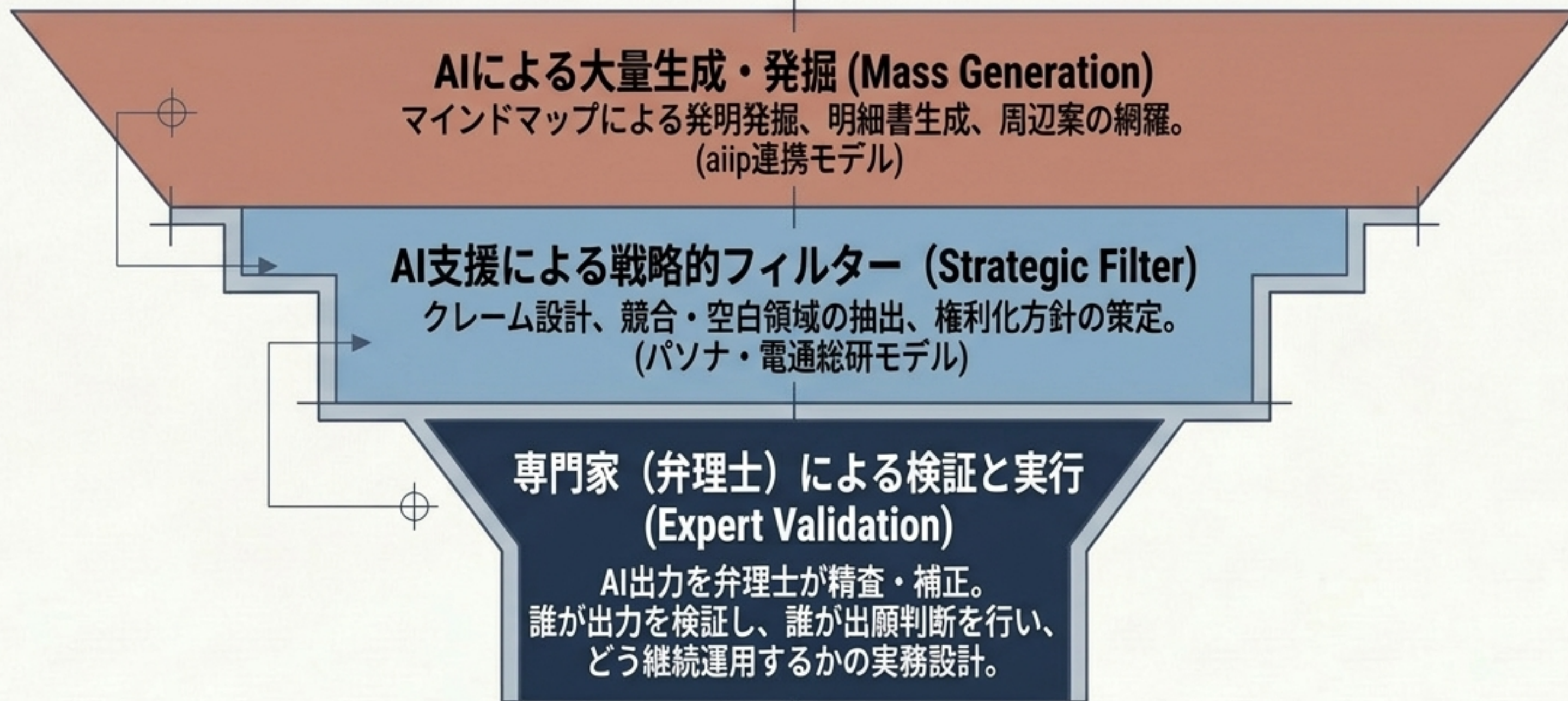
特許網は、AIモデルの性能だけでなく、自社の事業・技術情報をどれだけ適切に入力・更新できるかで決まる。

既存特許からの拡張：リバーズ・イノベーション・ループ



2025年のテーマ導出から進化。複数特許を横断して用途を発想し、見つかった用途仮説を直接新たな特許網の補強へつなぐエコシステム。

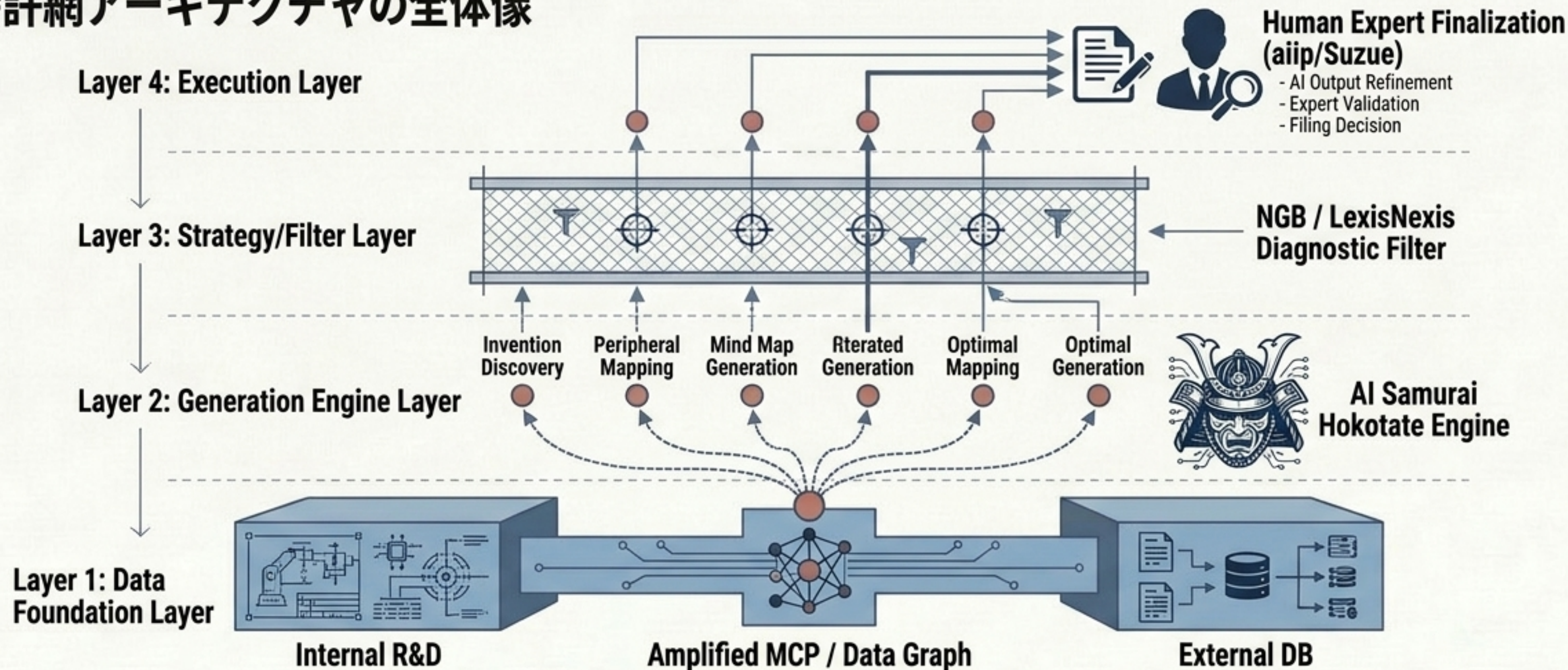
第4の柱：Human-AI ハンドシェイク・ファネル



「人とAIの協働」という概念から、「生成と専門家の判断の明確な分担」という具体的な業務フローへの昇華。

2026年 特許網アーキテクチャの全体像

特許網アーキテクチャの全体像



シルバーバレット（魔法の杖）は存在しない。
堅牢な特許網の構築は、これら特化型AIの
「戦略的オーケストレーション」によってのみ実現する。

評価フレームワーク：「虚栄の指標」から「真の価値」へ

処理速度の向上だけでは、特許網の強さは測れない。実装成果を測る新基準。

虚栄の指標 (Vanity Metrics)

~~量と速度：
「5分で5～6件の案を生成したか」~~

~~文章の完成度：
「明細書が人間らしく書けているか」~~

~~単一特許の査定率：
「その特許が取れたか」~~

真の価値 (True Value Metrics)

権利群の補完性：
「生成案が重複せず、**基本・改良・用途・実装**を相互補完しているか」

競合の回避への対応：
「想定する代替構成・設計変更をどこまで
保護対象にできているか」

事業との適合・費用対効果：
「将来製品・収益源と合致し、**総費用に
対して保護範囲が拡大したか**」

同じ事業・予算条件で、「人だけで設計した場合」と「AIスタックを活用した場合」の
競合回避余地を比較することが、真の有効性検証となる。

結論：効率化の時代から、 事業保護のための「設計」の時代へ

2025年は、AIが単一の知財業務を加速させる
「ツールの時代」であった。

2026年は、AIが自社データと結びつき、
競争を排除する網を自動で組み上げる
「システムの時代」へと突入した。

これからの知財戦略における真の競争優位は、
どのAIを使うかではなく、それらをいかに統合し、
事業戦略という「星座」を描き切るかにかかっている。

